

(1) 「神も仏もあるものか」、「被災者は嘆き宗教に問う」(産経 H28/5/21)

岩手県山田町の荒神社(あらがみしゃ)宮司、西舘勲(90才)は、6年前、同じことを言われた。「神も仏もあるものか」。

① 東日本大震災の避難所で、氏子の80歳の女性に食ってかかれた。お札を渡そうとしたら手を出さなかった。被災地を歩くと、宗教に失望する遺族の嘆きが聞こえる。「神様と仏様はなぜうちの子や親を守ってくれなかったの?」被災地を歩くと、宗教に失望する遺族の嘆きが聞こえる。震災で身内に先立たれた被災者の問いかけに、宗教は答えを持ち合わせているのだろうか。遺族の悲しみはとてつもなく深い。不条理を感じ、神の存在を問い正したくなる。しかし、宗教は明確な答えを示してくれない。遺族ははけ口を求め、「神も仏もない」と呪詛を吐く。

② 「答えはないのかもしれませんが」ローマ法王(当時)ベネディクト16世は、「どうしてこんなに悲しまなければならないのですか」と問う7才の日本の少女に、こう語った。

③ 山田町は震災で、825人が犠牲になった。荒神社の地元地区は222人が死亡している。西舘は無力感に襲われた。「神様はきっと助けてくれる」と信じる氏子の期待に応えられなかった。「神も仏もない」の嘆きは無理もない。「宗教の危機だ」西舘は全国の神社庁長の会合で発言した。西舘は瓦礫の中、海に向かって祝詞を上げた。

④ 「荒神様も流されているようでは、大した神通力でないね」氏子に冷やかされる。西舘は神社も被災して実はホッとしている。「俺もやられた。だからあんたも頑張れ」そう言える関係性を保つことができた。

⑤ 「荒神社」は魚の神様だ。地元漁師とともにある。西舘は今日もお勤めの祈祷を上げる。「息災と豊漁を、海の安寧を」。

(2) H20/7 私は、がん告知を受けました。「神も仏もあるものか」と思いました。幸いにしてH28/7、がん寛解。その私が、西舘宮司に対して不遜にも「神も仏もある」と釈迦に説法いたしました。私は、「自己の力をもってすれば、いかなることもなしとげられるもの」と考えていたことの誤りを知り、「自己の活動力というものが、神の力である」ということを信じました。自分の力というものは有限のものであって、いずれ「将来において通れぬ日」の来るといことを自覚いたしました。「利口ぶるのは、おおかた阿呆」は祖母の口癖でした。この病は、なかなか治りません。

(文責、平井一郎)